

クローズアップ

NGO・NPO

特定非営利活動法人

エスニコ

～異質なるものを愛する・外国人医療と国際交流～

Close Up

NGO・NPO

設立の経緯

四年前、中国人の夫婦からある相談を受けた。「子どもが手術を受けなければならぬ。帰国すべきか、日本で入院すべきか、医者は信用できるか、どれくらい費用がかかるか、入院した場合、日本語では分からないことがたくさんあるのではないか」。この夫婦は、社会的にも経済的にも信頼のある立場にあり、数多くの著名な日本人の友人もいた。にもかかわらず、ちよつとした知り合いでしかない私に相談を持ちかけてきたことが意外だった。その夫婦は、「日本人の友人に、病院の選択や診察の際の通訳、治療法の検討を相談したが、ことごとく断られた。責任の重いことにかかわることが嫌なようだ」と話していた。責任回避、何かと後ろに回って行動する日本人のイメージがここにもあった。

当時、私は札幌市内の総合病院で、外国人が通院や入院する際に簡単な通訳をする医療通訳の臨時ボランティアをしていた。最初は、私の中国語では到底能力不足と思い、「とんでもない大役」と断ったが、「とにかく人手が足りないので助けてほしい」との要望があり、医療通訳に携わっていた。果たして、語学力不足だけでなく、法律、医療制度、医療費、中国との習慣や文化の違いなどについて勉強不足であることが、私を大いに困惑させた。同時に、ボランティアの限界を感じた。

また、医療現場で通訳することはもちろん大切なが、迅速でニーズにあった的確

な外国人医療対策というもつと根本的な問題があることに気付いた。この問題は、各分野の協力と連帯、地道な努力、ネットワークの確立、さらには、医療機関の理解や市民の直接的な働きがなければ解決へと導かれることはない。外国人との交流パーティーには出かけるが、本当に困っている外国人に手を差し伸べない日本人ばかりではないはずであると考えていた。

ところが、調べてみると、北海道には民間の外国人医療支援組織は見当たらなかった。そこで仲間を募り、札幌市を拠点に独自に活動を開始した。その後間もない二〇〇一年九月にはNPO法人格を取得し、「エスニックにここ」という意味の造語「エスニコ」と命名して、外国人と医療機関とのコミュニケーションをサポートしていくこと、日常の異文化交流を楽しむことを目的として活動している。われわれは、必要なものがなかったから始めただけである。

組織とその特徴

エスニコでは、国籍が日本であっても日本語を母語としない人々を外国人と定義しており、その中には残留邦人の帰国者や国際結婚した人、旅行者、未登録の外国人を含んでいる。

また、一定の活動だけでなく、常に外国人のニーズに柔軟かつ迅速に対応した活動をしていることも特徴である。的外れな活動や外国人の自立を妨げる過剰な活動は避け、外国

エスニコ

〒060-0042 北海道札幌市中央区大通西16丁目1-13けいほくビル2階 TEL 011-640-2825

FAX 011-640-2890 E-mail:s25@xpost.plala.or.jp URL:http://www12.plala.or.jp/s25



↑外国文化の調査・視察として、中国新疆ウイグル自治区にある産婦人科専門病院を訪問



↑札幌在住中国人の子育て相談・討論会の様子

人が医療という現場で当然なる権利を行使するための手伝いをしており、このことは、日本人が外国で困ったときに望むであろうことと同じである。

会員構成は、医療関係者が二割ほどで、残りは留学経験のある青年が多く、学生、社員など職業や年齢はさまざまである。また、留学生をはじめとする外国人もエスニコの活動に参加しており、今年度の会員は一〇月現在九〇名となっている。

活動内容

外国人医療の問題には、①言語、②文化習慣の違い、③法律・医療制度の違い、④医療費などがある。現状を把握し、それに対して会員ができることを再確認しながら、次の活動を効果的に行っている。

外国人医療問題にかかわる活動

1. 各言語対訳健康データ・問診票の作成と配布
2. 医療通訳派遣体制の整備(緊急の場合は派遣も実施)
3. 勉強会、フォーラムの開催
4. 各種調査、視察
5. 外国人からの相談対応

異文化交流を楽しむ活動

1. 男女で楽しむ異文化クッキング
2. 語学会話教室
3. 日本語日常会話教室
4. NPO、NGO間の交流と情報交換

その他

1. 市民活動に関する相談員の派遣(受託事業)
2. 札幌在住中国人の子育て支援事業(福祉)

医療機構の助成事業)

3. メーリングリスト開設、連絡と意見交換
4. 会報「つばやき」発行

抱負と行政への要望

設立当初は、健康管理のサポートや勉強会を活動の主体にしており、医療通訳ボランティアを派遣する緊急対応可能な組織とする計画の策定までには至らなかった。言語問題への対策も、対訳の問診票を作成することで精一杯であった。しかし、現実には緊急派遣の要請が多く、そのためのスタッフ育成が急務であることを痛感した。そこで、医療やプライバシー保護に関する知識の習得が必須である医療通訳ボランティアの育成事業をより充実させるために、当該事業への助成金を行政機関へ申請してきたが、今のところ助成を受けることはできていない。今後も継続的に医療通訳ボランティアを育成し、自治体と医療機関の理解協力を得て、早急に派遣体制を整えたいと考えている。

二年前にエスニコが走り始めたころ、行政に対する不満を抱いたこともあった。しかし活動を通して学んだことがある。異質なものと触れ合うこと、知ること、そこから始めないと接点はない。理解や協力はそれからである。

民間と行政がそれぞれにできることを互いに活用し、より良い社会を形成することが重要であり、このことは、日本と国際社会との関係にも通じる課題である。

クローズアップ

NGO・NPO

Close Up

NGO・NPO

アジア女性センター (AWC) ～女性と子どもの人権とエンパワメントを求めて～

スタートのきっかけは？

一九八〇年代から日本で就労する外国籍女性が増加し、それに伴い、日本人男性と結婚して日本に定住する外国籍女性が増えていった。その多くがアジア出身で、言葉、法律、日本社会が分からない、あるいは、DV(ドメスティック・バイオレンス)、夫婦関係、夫の家族との関係、子育て、医療など家庭に関する問題で悩んでいた。外国籍ということ、また、女性であるということ、二重の差別を受け、精神的、身体的暴力を受けている女性も少なくなかった。このような女性たちからの相談を受けながらサポート活動を行っていた。

人権が尊重され、安全に安心して生きていく権利は誰にでもあることから、女性と子どもの人権擁護という観点で、一九九七年に福岡県に「アジア女性センター(AWC)」を立ち上げた。現在は、国籍に関係なく女性と子どもの総合支援を行っており、二〇〇二年度までにサポートした女性は延べ約二〇〇〇人以上(グラフ参照)。六人のスタッフと約四〇人のボランティア、約三〇〇〇人の会員が会を支えている。

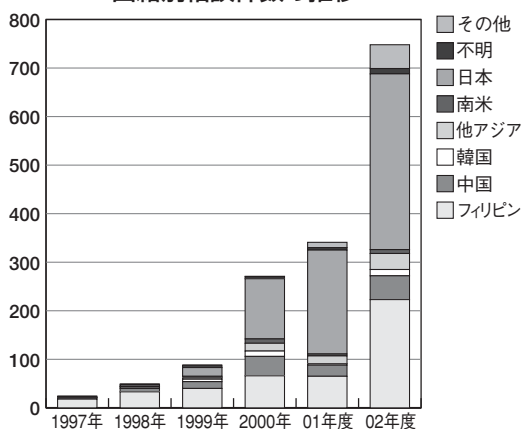
どんな活動をしようか?

AWCの活動は、次の四つの柱からなっている。

1 緊急支援としてのサポート事業

平日の午前九時から午後五時まで(緊急時はそれ以外の時間も対応)ホットラインや面

国籍別相談件数の推移



↑1997年よりアジア女性センターに寄せられた相談件数は年々増加している。※01年度については、2001年1月～2002年3月の件数

談で相談を受け付け、必要なサポートを行っている。二〇〇二年度の相談件数は七四八件で、最も多い相談は、夫やパートナーからの暴力を含む夫婦関係である。この相談受付は、当事者の意思に沿って一緒に考え、問題の解決を目指すことをコンセプトとしており、情報提供、公的機関や裁判所、弁護士相談、病院などへの同行、裁判支援、アドヴોકイト(当事者の立場で代弁すること)など、公的機関や他のNGOと連携しながらサポートしている。時には、一時保護へつなぐこともあり、言葉やシステムに不慣れた外国籍女性の、文字通り手となり足となり口となる。これまで相談の受付は、日本語と英語のみであったが、支援を求める女性のニーズに対応して、今年九月から月に二回、タガログ語による相談受け付けを開始した。

このほか、暴力で傷ついた子どものための

アジア女性センター(AWC)

TEL 092-513-7333 FAX 092-513-7366

Email:awc-a@atlas.plala.or.jp URL:http://www1.plala.or.jp/AWCenter/

アートセラピー、転校先が決まるまで学校に行けない子どものための学習サポート、母親が就職活動や家探し、調停などで外出している間の保育サポートなど、必要なプログラムを行っている。

また、これまでサポートしてきた女性たちは、働きながら子どもを育てている。そのフォローアップのために、年に一度ポットラックパーティーを開催し、近況を確かめ合っている。

一方、行政との協働として、近隣の五市町から相談業務を受託しており、「ちくし女性ホットライン」を開設している。ほかにも福岡県からは、DV被害者とその子どものための一時保護の業務を受託している。

2 日常支援としての日本語クラスとエンパワメントプログラム

情報は力である。日常生活レベルの日本語の習得を目指し、託児付きの日本語クラスを二カ所で開催している。習熟度別に分かれて、七〇名近くの女性が学んでいる。学びの発表の場として、外国籍女性のための日本語弁論大会を二度開催しており、地域の関心を集めた。日本語クラスは、女性たちのコミュニケーション形成、さらには、セルフヘルプにもつながっている。また、日本語習得のみだけでなく、日本のシステムを理解し利用できるようになるための社会勉強として、防災センター、図書館などさまざまな施設の見学を実施している。

さらにエンパワメントプログラムとして、

母国語を教える教室を開くためのサポートをしている。英会話、中国語会話教室開催のアシストを行っており、このプログラムが、語学指導のノウハウと自信を身に付けて、独自で教室を開くまでのステップになっている。

3 海外支援・交流事業

AWCでは、アジアに住む女性や子どもたちをさまざまな角度から支援している。

主な国はタイとフィリピン。女性たちが家計を助けるために国内外に出稼ぎに行ったり、性産業に就かずに、家族と暮らしながら生計が立てられるように、それぞれの民族のデザインを生かした刺繍、織物、染色、縫製のバッグや小物などを製作している。そのクラフト品の販売を通じた自立支援である。

日本から帰国した女性たちの多くは心身を傷つけられている。NGO「タイー日移住ネットワーク(SEPOM)」は、タイ東北部で女性たちとTJC(タイ人女性と日本人男性との間に生まれた国際子)のケアと、エンパワメントのための自立支援を行っている。AWCはSEPO

Mを設立から支援しており、タイ東北部のNGO活動を視察するスタディーツアーを実施した。



↑9人のJFCによるワークショップミュージカルの一場面 (2003年9月30日)

フィリピンにもJFC(フィリピン人女性と日本人男性との間に生まれた国際子)の問題がある。父親は子どもを養育しない、あるいは行方を知らせないことが多い。AWCでは、これまでにJFCによるワークショップミュージカルの公演を二回行った(写真参照)。

マニラで日本から帰国した女性たちやJFCの相談・自立支援を行っているNGO「DAWN」のJFCが出演し、公演を通じて、実情を社会に訴えようとするとともに、父親探しを行った。その結果、数名が父親と会うことができ、その中には、養育につながったケースもある。

4 提言・ネットワーク事業

AWCでは、日本や世界で女性と子どもたちが置かれている現状、特に差別や暴力の問題を含めた人権に関する講演会やシンポジウム、セミナーの開催や、ほかのNGOとネットワークを活用した情報交換や共同提言を行っている。

今後の課題は??

支援者と要支援者という関係ではなく、同じ社会に生きる市民同士として、よりよい支援とは何かを常に念頭に置いて活動していきたい。

また、外国籍女性へのDVなど暴力の解決は、女性たちが日本で働きかけにかけた背景をとらえなければならぬ。女性たちの多くは、昔とは形を変えた現代の人身売買の被害者であり、その根絶に向けて活動していきたい。